

Harry S. Truman の英語における リスト文について

On Harry S. Truman's Use of List *There*-Sentences

(1992年4月8日受理)

沼本 健二
Kenji Numoto

Key words: リスト文 List *There*-Sentence, 談話標識 Discourse marker,
言語使用域 Register

Abstract

This paper examines the English of Harry S. Truman in order to see how list *there*-sentences occur in various styles of discourse.

Rando and Napoli (1978) divide list sentences into two types — partial and complete, and these list sentences often occur as answers to questions. However, a third type of list sentence, which can be called an 'implicit' list sentence, often occurs in written discourse and introduces an item of information which helps comprise a list. Sentences of this type often occur with link words, or discourse markers, such as *first*, *then* and *finally*, and help identify a list as a piece of discourse. Sometimes they themselves function as discourse markers.

I はじめに

この小論では、リスト文の生起する環境、それが談話の中で果たす機能、リストの構造、などを調べるために、Harry S. Truman の英語の中にリスト文の用例を求め、検討・考察を加える。従来、リスト文は文と文との関係から、主として、質問とそれに対する応答という関係から、論じられてきた。¹⁾ Rando and Napoli (1978) が指摘するように、リスト文が応答の中にもっともよく生じるとすれば、それは無理もないことである。²⁾ しかし、リスト文が、リスト、列挙、例示などの解釈をもつのであれば、当然、それは談話のもっと大きな単位を構成する可能性をもつはずである。また、列挙、例示などの機能は、話しことばだけの占有物ではなく、書きことばの中にも生起するはずである。このような見地から Truman の英語をみていくことにする。

There 構文は、話者が構成しようとする談話の中に、ある事物を新情報として導入する機能を持つ。従って、主語となる名詞句はふつう不定名詞句である。しかし、実際には、定冠詞付きの定名詞句や固有名詞が意味上の主語として用いられている例は多い。このような There 構文は、リスト文、There 分裂文、Verbal existential sentences に分類できる。³⁾

リスト文は主語としての定名詞句の生起を許す。その理由について様々な解釈がある。Rando and

Napoli (1978) は、非前方照応性 (non-anaphoricity) の概念を用いて、リスト文においては、選択された項目全体が新情報として提供されるのであって、それぞれの項目自体が新情報として意味をもつのではないからである、と説明している。中村 (1980) は、リスト文を、存在文とではなく、it 分裂文と同一平面上において論じている。そして、リスト文は、There 分裂文の前提を表す埋め込み文が削除された構文であり、そのために固有名詞や定冠詞付きの定名詞句の生起が可能になるのである、と結論している。それに対し、岡 (1980) は、中村 (1980) を取り上げ、リスト文でありながら埋め込み文の復元が不可能なリスト文の存在を指摘し、その中の定名詞句の生起について、Rando and Napoli (1978) に近い立場から、解釈を試みている。定名詞句と談話の間に生じる新しい関係が定名詞句の生起を許す、というのである。

筆者は、ここでは上記の議論には深くは立ち入らず、これらの議論から自ずと明らかになりつつあるリスト文の特徴と種類を手がかりに、リスト文の行動を様々な談話の中で観察することにする。

Ⅱ リスト文の特徴と種類

リスト文の主な特徴は、次のようにまとめることができる。

- (1) リスト、列挙、例示などの解釈がある。
- (2) 不定名詞句だけでなく、定名詞句の生起も許す。
- (3) 談話を始める文としては用いられない。⁴⁾

リスト文の種類は次の通りとする。(1)と(2)については例を示す。

(1) 部分的リスト文

Q: How could we get there?

A: Well, there's the trolley...

(2) 完全リスト文

Q: What's worth visiting here?

A: There's the park, a very nice restaurant, and the library. That's all as far as I'm concerned.

(3) 潜在的リスト文

Rando and Napoli (1978) は、リスト文を上(1)と(2)の2種類に分類し、イントネーションにも言及している。⁵⁾ しかし、例文でも分かるように、分析はもっぱら会話文に限られており、書き言葉におけるリスト文の分析は不十分である。そこで、書き言葉におけるリスト文について考察するために、東 (1982) にならい、「潜在的リスト文」という用語を用いることにする。⁶⁾ これは、1つのリストを構成する複数の項目の一部、または、全てが There 構文で導入されているとき、それぞれの There 構文を指す用語である。

Ⅲ 資料について

ここで、Truman の英語を取り上げた理由に言及しておかなければならない。Truman はいろいろなスタイルの談話を、書物の形で残している。彼は筆まめであった。高校時代の同級生で、後に生涯の伴侶となった Bess に書き送った手紙が、*Dear Bess* となって現れた。また、彼は強い責任感と義務感をも

つ人であった。そのため、引退後も元大統領として啓蒙活動に励んだ。その結果、気さくな話好きの一面が *Plain Speaking* に、若者に対する真摯な語り掛けは *Truman Speaks* となって現れた。さらに、事実に基づいて、数々の政治的決断について書いたものが *Memoires* である。このように、1 個人の個人言語を検討することにより、さまざまなスタイルの談話においてリスト文の現れ方を調べることができるからである。

以下に書名と、談話のスタイルについてまとめておく。

1. *Plain Speaking: An Oral Biography of Harry S. Truman* 会話の文体
2. *Dear Bess: The Letters from Harry to Bess Truman, 1910-1959* 手紙の文体
3. *Truman Speaks* 講演の文体
4. *Memoires of Harry S. Truman: Year of Decisions* 文語体

IV リスト文の生起と言語使用域

1. *Plain Speaking* は、Truman が大統領職を引退して10年近く経た後、1961年から1962年にかけて、Merle Miller が元大統領と交わした会話から書き起こしたものである。

本書中の Truman 自身の発話の中に、リスト文を用いたリストは4例あり、その中3例について定名詞句が認められる。

(1)の例は完全リスト文である（以下、引用文中の下線は筆者）。会話文の特徴として、同一語句の繰り返しが見られる。

(2)は、北軍を勝利に導き、後に大統領になった Grant の優柔不断と無能振りについて語っているところである。この引用中リスト文は2例ある。いずれも、一見して、定名詞句が非制限関係節を従えた潜在的リスト文と考えられるが、どちらの名詞句もリストを構成しているとは言い難いし、パラグラフ間の結束を強めているとも言えない。ここでは、政治腐敗の例示と考えるのが妥当であろう。

(3)では、潜在的リスト文がリストの第2番目の項目を談話の中に導入している。このリスト文により、読み手はリストの第1項目を意識し、完結したリストを談話の一単位として読み込むことができる。また、列挙の機能をもつ談話標識である *then* と共起することも見逃してはならない。⁷⁾

(1) "You see the thing you have to remember. When you get to be President, there are all those things, the honors, the twenty-one-gun salutes, all those things, you have to remember it isn't for you. It's for the Presidency, . . . (*Plain Speaking* : 228)

(2) "And after he got elected in 1868, why the people around him were stealing the country blind. Old Gould and Fisk wined and dined him and tried to convince him to keep the government out of the gold market so they could clean up on it, and for a while they did. And there was the Credit Mobilier scandal in which speculators made tens of millions of dollars by bilking the Union Pacific Railroad, . . .

"As I say, Grant wasn't involved in any of those things personally, but he has gone down. . . .

"But he was reelected, mostly because the Democratic candidate was Horace Greeley, the fellow I told you was editor of the *New York Tribune*. . . .

"But he got reelected, and his second term was even worse than his first. A lot more fraud and corruption were uncovered, and there was the panic of 18 and 73, and through it all Grant just sat there, not knowing what to do. . . . (Ibid. : 355-356)

- (3) "I did. There were all kinds of hysterical bills, legislation that the people who were so scared of the Communists said would take care of the matter and forget about the Constitution. The Mundt-Nixon bill was one, you remember, and then there was the McCarran Act, which was finally enacted into law over my veto, but I spoke out against things like that every chance I got. (Ibid. : 443-444)

この会話の中で、編者は数多くの質問をしている。もし、Rando and Napoli (1978) が言っているように、質問に対する返答の中にリスト文がもっともよく現れるとしたら、もっと多くの用例が見つかるであろうが、比較的頻度が低いのは、個人差によるものと考えられるべきかもしれない。

2. *Dear Bess* は、Truman が後に妻となった Bess に書き送った、約1,200通の手紙を収録した書簡集である。身近に起こった日常的な出来事から国政に関することまでが、飾りのない、分かり易い英語で書かれている。この中に、定名詞句が生起するリストは3例ある。(4)と(6)は完全リスト文であるが、(5)は also と共起し、リストの第2項目を導入する潜在的リスト文である。しかし、第1項目は(3)におけるほど明確に示されていない。

- (4) I'll save the money to go to some other show with or else throw it away on a hat. Four dollars ought to get a pretty good one. I wish I could get an overcoat for that much. It seems to me that it would be an excellent thing if people wore the same styled costumes for the seasons instead of changing. There's China and Holland. They seem to be as well satisfied with their clothes as we are with ours.

(*Dear Bess* : 111)

- (5) Four years of litigation have been some strain both physically and financially. If Uncle Harry will only let me act as his agent in selling some of his property, though, things will be fine. Also, there is Montana. I'd almost forgotten Montana. I go there next Tuesday. (Ibid. : 168)

- (6) I took the Throop family and went to the Neosho River the other evening. We met a threshing machine and I ran off in the ditch. Had to unload to get out. The roads down here are so tough that shock absorbers would wear out in one day. There are five Throop kids, the old man and old lady. She's fat but good. He's redhead and half cross-eyed but he's stuck to us through thick and thin.

(Ibid. : 205)

3. *Truman Speaks* は、1959年4月、Columbia Universityで行った、3回の連続講演とパネルディスカッションの録音テープからの書き直しである。講演の対象は歴史と政治学を専攻する学生で、大統領の職務、憲法、民主主義に対するデマの脅威について話している。学長のはしがきによると、Truman はできるだけ打ち解けた講演会にしたいと申し出ており、実際に、plain-spoken and straightforward speech であったと言われている。談話のスタイルでいえば正式スタイルに入るこの講演が、*Plain Speaking* と違う点は、話者が前もって準備した原稿に基づいて話した可能性があることと、対象が多数

の学生であることである。確かに、単音節語を多く使用し、専門用語を控えている点は同じであるが、談話の構造はしっかりしたものになっている。

この講演中、Truman は定冠詞付き定名詞句を含むリスト文を1回だけ使用している。その例を次に示す。

- (7) I've found that that two-thirds vote is pretty hard to get in some instances. I sent a great many vetoes to the Congress—I think about one hundred and forty. They passed only a handful of bills over my veto. One of them was that horrible McCarran Immigration Act, which they later had to amend, and on which I helped to beat the opposition in 1948 when I was running for President. Then, there was the Taft-Hartley Act, which they're still monkeying with. . . . (Truman Speaks : 46)

この潜在的リスト文は、Then と共起してリストの第2項目を導入し、One of them によって導入される第1項目と共に談話の構成を強化する役目を果たしている。非制限関係節を伴う点は(3)と同じである。次の例は、大統領の職務に関する説明の後、三権の残りの二つを手際よく談話の中に導入する部分である。ここでは、定冠詞付き定名詞句が、There 構文の主語である another branch の同格語として、間接的に用いられている。この There 構文は、Then, another と共起していること、さらに、パラグラフの第1文として登場し、リストの第2番目の項目をトピックとして導入している。

- (8) Now there's been a great deal of conversation about the constitutional set-up, and it sometimes causes strained relations between the President and the Congress and the courts. Well, it was set up that way on purpose. . . . The legislative branch of the government has control of the purse strings, and if you think a government can run without money, you ought to read the last budget. . . .

Then, there's another branch of the government known as the courts, the judicial system. . . .

(Ibid. : 8-9)

この講演の中で、Truman は潜在的リスト文をもう1度用いているが、主語は another stumbling block である。いずれの例を見ても、Plain Speaking, Dear Bess と比較して、潜在的リスト文が談話のつながりを強化する役割を果たしていることが、はっきり読みとれる。

また、第1回の講演の冒頭で、大統領の職務を6項目列挙しているが、そこではリスト文は使用していない。これが、意図的なものであるのか、職務の記述に名詞句がなじまないためであったのかは、はっきりしない。

4. Memoires は、Truman によれば、在職中に起こった出来事や、様々な決断を下すまでの過程について、できるだけ忠実に国民に伝えるために書いた回想録である。ジャンルとしては、歴史のジャンルに属する。著者の経験を考えると、読者との情報量の差は歴然としている。執筆の目的からして、著者が情報の伝達にふさわしい方策を採ることは、じゅうぶん予想できることである。このことを考慮に入れながら、リスト文の生起の仕方を検討していくことにする。

リスト文を用いたリストは、少なくとも20回用いられている。その中、定名詞句を含んだリストは12

回である。また、潜在的リスト文の方が、完全リストよりも頻度が高い。

次の例は、3つの項目を含むリストを完結させるために、6個のパラグラフから成る長い談話を構成している。第1項目は、Firstと共起する潜在的リスト文によって提示され、非制限関係節を従えている。リスト全体は、序数詞によってつながりが強められている。

(9) The reports now being made to me by Byrnes, Stettinius, and Bohlen, and my study of secret messages and cables, revealed the three alternatives that faced the negotiators at Yalta. First, there was the Polish government-in-exile, which had been established in London early in the war. . . .

Though the government-in-exile had long since been recognized by both Great Britain and the United States, it was obvious that those who composed it could not be forced on the Russians as a group. . . .

A second alternative had been the one sponsored by Stalin. He had insisted—and he still maintained this view—that the Lublin group or, as it was being called by this time, the Warsaw government, was a fully functioning de facto government and should continue. . . .

. . . Consequently, the discussion turned to the third alternative. . . . (Memoires : 24-25)

次に、完全リスト文を2例示す。(10)では、3個の固有名詞と1個の普通名詞によってリストが完結される。項目の補足説明のために、同格の名詞と非制限関係節が使用されている。一方、(11)では固有名詞のみが用いられているが、リストはChurchillを加えて完成する。

(10) West on Waldo lived the Pittman family. There were Miss Maud, a school-teacher, and Miss Ethel, then an older boy, and Bernard, who was Vivian's age and his pal. (Ibid. : 117)

(11) On the British side, in addition to Churchill, there were Lord Leathers, the Minister of War Transport ; Field Marshal Sir Alan F. Brooke; Marshal of the Royal Air Force Sir Charles F. A. Portal ; Admiral of the Fleet Sir Andrew B. Cunningham ; General Sir Hastings L. Ismay ; Field Marshal Sir H. M. Wilson ; and Major General R. E. Laycock. (Ibid. : 381)

リスト文が例示のために用いられる例は、(2)にみられるように、会話の中によく現れる。(12)も例示の読みをもつリスト文であるが、(2)の例と違うところは、for exampleというLink wordsによって機能が明示されていることである。この引用の次のパラグラフでは、for instanceの例もみられる。

(12) The difficulties we faced at this time illustrated the need we had for firm and orderly procedure. There was, for example, the case of General de Gaulle and his territorial demands for France. (Ibid. : 238)

最後の用例は興味深い。第1項目は潜在的リスト文により導入され、非制限関係節を伴っているが、ふつう共起するはずのFirstやFirstlyのような語句を伴っていない。このことから、潜在的リスト文そのものに列挙の機能が備わっていると考えることができよう。実際に、不定名詞句の生起する潜在的

リスト文の中に、パラグラフの第1文として現れ、第2項目を導入する用例がいくつか見られる。また、動詞に過去完了形が用いられているが、これは前文の had brought に呼応したものであろう。⁸⁾ 次のリスト文は潜在的リスト文であるが、形態的には完全リスト文である。Then と共起して第2項目以下を導入し、リストを完結させている。さらに、動詞の数にも注目しなければならない。(10)と(11)では動詞は複数形であるが、(13)では単数である。必ずしも数の一致が見られないのは、存在文の場合と同じである。

- (13) I was thinking of the history of previous occasions when dictators and absolute rulers had brought disaster to their people and their countries. There had been Philip II of Spain and his armada, the destruction of which was the beginning of the end for Spain as a world power. Then there was Louis XIV and the Battle of Blenheim ; Napoleon and Waterloo ; the Kaiser ; Hitler ; and — now — the war lords of Japan. This second surrender of World War II marked the ignominious defeat and downfall of the second of the world's cruelest dictatorial governments. (Ibid. : 460)

V おわりに

Truman の英語を対象としてリスト文の現れ方をみてきた結果を、以下にまとめてみる。

1. リスト文は、必ずしも話しことばに属するとはいえない。むしろ、書きことばにおいて、列挙、例示などの機能を発揮する。
2. リスト文は、談話を始める文とはならない。
3. 完全リスト文と潜在的リスト文では、談話のスタイルによって生起の仕方が異なる。前者は話しことばと書きことばの両方に現れるが、後者は書きことばの方によく現れる。
4. 潜在的リスト文は、パラグラフ間のつながりなど、談話の結束を強める働きをする。その場合、first, then ; for example, for instance などの Link words または Discourse markers と共起することが多い。
5. リスト文そのものに、Discourse markers としての機能が認められる。

以上、従来の研究成果を出発点とし、文と文との関係を越えた談話の単位の中で、リスト文の現れ方について検討を加えてみた。しかし、この結果は、1個人の個人言語を対象としたものであり、リスト文の特徴を正しく把握するためには、さらに多くの言語資料を対象とした研究が必要である。

(注)

- 1) 東 (1982) は、リスト文を対話以外の談話の中で論じている数少ない例で、雑誌、新聞、小説など、様々な使用域からの用例が示されている。
- 2) Rando and Napoli (1978 : 300, 308) には次の記述がある。
 - (1) these LIST sentences often occur as answers to questions.
 - (2) Answers to questions, however, while they give us the most frequent contexts for list sentences, are not the only contexts ; . . .
- 3) 中村 (1980) は、定名詞句の生じる Cleft sentence と There 分裂文との類似性に注目し、リスト文における

定名詞句の生起の理由を説明しようとしている。安藤 (1991) は、リスト文と Milsark (1974) のいう Verbal existential sentence の定名詞句は、ともに聞き手にとって未知の情報である、としている。

4) 中村 (1980:22) は、There 分裂文は、It 分裂文と同じく、談話を始める文としては用いられないから、There 分裂文の一種である考えられるリスト文も談話を始める文とはならない、と結論している。

5) Rando and Napoli (1978:300) は、partial, complete という用語を使用している。

6) 鈴木 (1977) は、explicit numeration, implicit numeration という用語を用いているが、東 (1982) は、後者を参考にしたものと思われる。

7) then を、Ball (1986:142) は列挙 (enumeration) の機能をもつ Link word として扱い、Shiffrin (1987:250-254) は Discourse marker として詳述している。

8) Rando and Napoli (1978:311) は、一般に、未来形や完了形は許されないとしながらも、つぎのような例を紹介している。なぜ、この例が容認できるのかは説明していない。

Q: What families have ruled England?

A: There have been the Plantagenets, the Tudors, and the Stuarts.

参 考 文 献

- 安藤貞雄. 1991. 「存在文再考(1)」 *The Rising Generation* Vol. CXXXVII. No. 7. pp. 18-20.
———. 1991. 「存在文再考(2)」 *The Rising Generation*. Vol. CXXXVII. No. 8. pp. 20-22.
- 浅田壽男. 1979. 「there 構文の限定主語」『語法研究と英語教育』Vol. 1. 山口書店
- Ball, W. J. 1986. *Dictionary of Link Words in English Discourse*. Macmillan Publishers Ltd.
- Ferrell, Robert H. ed. 1983. *Dear Bess: The Letters from Harry to Bess Truman, 1910-1959*. W. W. Norton & Company.
- 東 毅. 1982. 「there 構文の意味主語としての定冠詞つき名詞句について」『室蘭工業大学研究報告・文科編』10 (4). pp.563-579.
- Miller, Merle. 1973. *Plain Speaking: An Oral Biography of Harry S. Truman*. Berkley Publishing Corporation.
- 中村 捷. 1980. 「There 分裂文」 *The Rising Generation*. Vol. CXXV. No.11. pp. 20-22.
- 岡 正樹. 1980. 「There 構文覚書」『西南学院大学英语英文学論集』21 (1). pp. 69-91.
- Rando, Emily and Donna Jo Napoli. 1978. "Definites in There-Sentences" *Language*. 54. pp. 300-313.
- Schiffrin, Deborah. 1987. *Discourse markers*. Cambridge University Press.
- 鈴木英一. 1977. 「存在文の意味上の主語と定性・不定性」『山形大学紀要 (人文科学)』第 8 巻第 4 号. pp. 517-543.
- Truman, Harry S. 1955. *Memoires by Harry S. Truman: Year of Decisions*. Doubleday & Company, Inc.
———. 1960. *Truman Speaks*. Columbia University Press.